

ニューカマーの高校生の学校適応に関する研究 －W 県立 Y 高校に在籍する 4 人の生徒のインタビューから－

Research on the Adaptation of Foreign New Comers in Japanese High Schools
－An Interview with four students at Y High School in Wakayama－

磯部 有佳子
ISOBE Yukako
(和歌山大学教育学部大学院生)

松浦 善満
MATSUURA Yoshimitsu
(附属教育実践総合センター)

本研究は、ニューカマー研究の動向を明らかにするとともに、和歌山県内におけるY高校におけるニューカマー生徒の学校適応の現実と課題に関して、半構造化インタビュー法をもちいて明らかにしている。これらの調査研究の結果、ニューカマー高校生の学校適応に関しては①親子間コミュニケーションの問題、②アイデンティティ形成の問題、③いじめ・不登校問題、④言語の習得の問題、⑤学力形成と進路の問題、などが関係する要因群として明らかになった。また、これらの諸問題の解決の必要性を提言している。

キーワード：ニューカマー問題、半構造化インタビュー、高校生徒指導、進路指導、学校適応

1. 本研究の意義

1.1 ニューカマーの定義と動向

まずはニューカマーの定義をしておこう。

「ニューカマー」という言葉に明確な定義があるわけではないが、一般的には、1970年以降に、さまざまな経緯で日本に在住する外国にルーツをもつ人々の総称である。(清水・2006)

ニューカマーに対して、日本の植民地支配と第二次世界大戦を契機に日本に在住、あるいは強制的に連行された在日韓国・朝鮮人や在日中国人には「オールドカマー」という対語が使われている。

かつて、第二次世界大戦前の植民地政策のため、1945年には朝鮮人・中国人を中心として230万人の外国人がいたが、後に在日韓国・朝鮮人は減り続けた。その結果、1975年には在日定住外国人総数は75万人に減少していったが、近年、経済的な利益と生活の豊かさを求めて、新しく来日してきた「ニューカマー」が急増した。入国管理統計によると、2006年末現在、日本における外国人登録数は208万人余りでこの数値は1996年に比べると約1.5倍に増加した。

外国人登録している国籍は188カ国にのぼるが、最も多いのが全体で三割を占める「韓国・朝鮮」の約60万人（そのかなりの部分はオールドカマー）、次に「中国」の56万人、「ブラジル」31万人、「フィリピン」

の19万人、「ペルー」の6万人、「アメリカ」の5万人となる。

ちなみに世界の38億人の人口の内、外国に在住するのは約2億人に達し、年々比率を高めており、日本における外国人登録者数も今後増加の一途にある。このことは次にのべるこれらの外国人の師弟、子どもたちの教育問題・学校適応問題を発生させる。

1.2 本研究の意義

文部科学省が2005年に実施した調査によると、我が国の「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の数は同年9月現在、約2万人在籍しており、平成3年の調査開始以来、最も多い人数となっている。1991年の調査と比較すると児童生徒数は3.8倍、学校数は2.7倍となっており、今後も増加していくにちがいない。

こうした事態は、児童・生徒がみな日本語を理解する日本国民であることを前提に行われてきた日本の学校教育にとって、まさに想定外のものであった。ニューカマーの子どもたちは、慣れない学校生活の中で不安や、戸惑いと葛藤を深刻な形で経験しているのである。

最近では、彼らの「不就学」、「不登校」に関心が寄せられてきているが、実際、ニューカマーの子どもたちの日常の問題は十分に引き上げていない。

また学校現場（特に和歌山県内）では、一部の地域と学校にニューカマーの子どもが在籍していることも

あり、全般的に注目度はいまのところ低い、グローバル化社会にあって早晚この問題が学校関係者に直面するテーマになることは予想に難くない。

筆者の内の一人は勤務する県立Y高校で4人のニューカマー生徒に出会い彼らの指導にあたってきた。彼らは今年の3月無事卒業したが、在学中は学校適応と進路問題での課題を抱え、当人を含め多くの教師が未経験の対応をおこなった。とくに本論では、彼らの背後にある、親子関係、学校生活、Y高校に入学するまでの経緯、将来展望などに関して、本人へのインタビューを通して、彼らの生の声から分析することができた。

さらに本研究では面接調査法について近年盛んに活用されだした「半構造化インタビュー法」について、その内容と利点について明らかにする。

2. 研究方法

2.1 先行研究の検討

1990年代に入って、日本の公立学校に在籍するニューカマーの子どもが増加した。彼らは、「日本語が十分話せない」ことが特徴であり、彼らに対する教育支援も、ほとんどが「日本語指導」と「適応指導」に関係するものである。しかし、「言葉の壁」だけでなく、彼らの背景にはさまざまなプロブレムが生じている。それは、家族との関係、日本人の師弟との関係、教師との関係、日本文化との関係、つまり、学校生活を送るのに様々な問題が生じ、彼らに大きなストレスを与えているのである。

「ニューカマーの子どもたち」に関しての研究は今までも様々な観点からなされてきた。中でも、児島彰(2006)、清水睦美(2006)、吉元幸夫(2006)、志水宏吉(1999)らは、学校関係者というよりもむしろニューカマーの師弟(児童生徒)の声を取り上げており、実証的研究を最優先としている。

児島は、ニューカマーの子どもたちの適応過程に焦点を定めた実証研究が、より多様な展開を見せつつも三つの流れに跡づけられる、と論じている。

その第一は、文化間移動により二つあるいはそれ以上の文化状況を生きざるを得ない子どもたちが直面する異文化問題である。この点に関して、志水は、日本の学校は、異質性を排除する傾向が伝統的に強く、ニューカマーの子どもたちは、日本の学校という環境に対して、「不適応」に陥るケースが多いと断言している。その一つが教師に見られる特徴的な思考パターンである、と論じている。この研究は、大いに参考になった。

彼は、わが国の教師たちは、子どもたちが持ち込んでくる、彼らの家庭的バックグラウンドや生育暦由来する「異質性」を生かそうとするよりは、それを極

力排除しようとする強い「脱文脈化」傾向があること。そのうえ、彼らを、「我々の学校」や「私のクラス」に所属する同質的集団の一員として扱い、親密に関わっていこうとする構えを有している(同質化傾向)。そして、クラスや学校の中で生じる学習上あるいは生活指導上の問題の原因をもっぱら子ども自身に帰属させ、なお一層の努力や心がけの変化を求めようとする姿勢を強く有しているのである(個人化傾向)。と論じ、この三つの観点でさらにわが国の教師特有の思考パターンを有している。

これは、学校には課題を抱えている子どもが多く、外国人だから、「特別扱いはできない」とする日本の教師の独特の認識のように思える。本研究では、ニューカマーの4人の生徒たちから見た日本の教師、また、教師に求めるものは何かを追求していきたいと思う。

第二に児島は、異文化適応のあり様を左右する重要な要因として、言語の問題があると述べている。彼は、言語習得のレベルを「日常のコミュニケーションに必要なレベル」と「学校で授業についていくために必要なレベル」の二つのレベルに区別して捉える見方が、教育関係者中で一般化していると論じている。

「日常のコミュニケーション」においては、善元(2006)も、日本語を覚え、母語が消失しつつある子どもと、日本語ができず母語しか話せない親とのコミュニケーションのギャップがあると述べているが、本研究では、特に親とのコミュニケーションに関して子どもたちがどう感じているかを明らかにしたい。

「学校で授業についていくために必要なレベル」では当然欠かせない問題として、学力の問題がある。これに関しては、児島も、彼らの「低学力」は、十分に予測できると言っているが、ここで問題となるのは、彼らの進路問題である。元中学校教員であった神戸(2006)は、ある程度人生の方向付けがなされる進路選択は、15歳の子どもたちにとって、親の支えなしには不可能なことである。しかし外国人生徒の親は日本の教育制度・受験制度を経験しておらず、理解できないため、実際には生徒自身が選択しなければならないのである。そのため、日本人生徒以上に不安が募り、精神的に不安定になり、夏休み以降の生活が乱れることが多い。一方教員は学級全員の進路指導に追われる中、外国人生徒に対しては彼らが日本社会で生きていくために、最低限高校は卒業させないと、ということが先行し、彼らの不安感にじっくり寄り添うこともなく目先の合格だけ目標にしてしまう、と論じている。

当方がインタビューした4人の生徒は高校進学についてどんなドラマがあったのだろうか。そして、高校進学後どんなことを感じているのだろうか。高校卒業後どうしたいのだろうか。本研究では、彼らの生の声を聞くことによって、彼らの本当の思いを明らかにし、ニューカマーの生徒たちの高校進学について、特に追

求していきたいと思う。

なお、言語の問題は、先に述べた異文化適応や、次に述べるアイデンティティの問題とも関係しており、言語は、あらゆる面において、重要な研究対象である。

第三に児島はアイデンティティの問題があると述べている。かれは、ニューカマーの子どもたちは、二つあるいはそれ以上の文化なり、生活環境の中で発達過程の重要な時期を過ごすことになり、このような子どものアイデンティティ形成が、親のそれ以上に複雑になることを指摘している。

「日本の学校のルールや学校生活」の内容はどちらかといえば、規律正しく、個人よりも集団を重視する、先生に対しては尊敬する、というイメージに近い。しかし、実際今の学校生活はそのイメージと全く逆である。本研究では、学校生活環境において彼らの「日本人」と「外国人」を使い分けるアイデンティティについて追求したい。

この他に、ニューカマーの子どもたちに問題になっているのが、不登校・いじめの問題である。

清水（2006）は、「不安な毎日」が個人の内部にどのように蓄積されていくのかという過程と、その結果として、「学校へ行ってもつまらないから、休むことが多くなった。」と語られると述べている。また清水は、ニューカマーの子どもたちの多くは、大なり小なり、日本の学校でいじめられた経験をもっている、とも述べている。

私たちは、4人のインタビューを通じてこの「不登校」「いじめ」についても深く追求し、彼らが実際どんな経験をしてきたのかを明らかにしたいと思う。

児島（2002）は、ニューカマーが集住する特定の地域、そこに所在する特定の中学校に在籍する日系ブラジル人を対象に調査を実施した。それによると、ニューカマーの子どもたちのニーズと学校文化が提供するものとの齟齬を、より深いレベルで把握することが可能になり、今日の日本社会には、日系ブラジル人以外にも韓国、中国、インドシナなど様々なニューカマーが存在し、それぞれの来日の経緯、日本での生活状況、親子関係、それまでに受けた教育経験や教育期待、将来展望、利用できる資源などにおいて多様である、と論じている。

本研究では、4人のニューカマーの高校生へのインタビューを通して、彼らが、学校、教師に何を求めているのか、教師として、彼らの叫びを深く受け止め、考えたい。

とりわけ、学力や、進路問題に関しては、先行研究ではほとんど触れていない。高校受験という壁を目の前にして、彼らの葛藤、訴えとはどのようなものであったのだろうか。また、卒業後の彼らの将来像とはどのようなのか。本研究では、インタビューを通して、日本の公立高校の受験を経験し、卒業するニューカマーの生徒

の進路問題について、特に深く追求したいと思う。

2.2 インタビュー方法

インタビュー方法には、主として「構造化」「半構造化」「非構造化」の3類型がある。

まず「構造化」インタビュー法は、質問項目、質問順序など、インタビュー内容があらかじめ決定されているものを指し、「標準化されたインタビュー」、「形式的インタビュー」、「指示的インタビュー」なども、同様の範疇にはいる。さらに質問項目と順序だけではなく、回答の選択肢も限定されて決められており、構造化が徹底している場合は、質問紙調査の個人面接法（訪問面接調査）ともいえる。

つぎに、「非構造化」とは、研究テーマに沿って大まかに話題を設定するだけで、インタビューする枠組みは、最低限に止める。むしろ調査対象者に自由に語ってもらうことを重視し、調査者は、話者の応答のきっかけ作りと、テーマを設定するだけで、話題の順序もその場の流れで決める。「非公式インタビュー」「自由書式インタビュー」「非指示的インタビュー」などはこの範疇にはいる。

本研究で採用した「半構造化インタビュー」であるが、「構造化」と「非構造化」の中間的なタイプといえる。これには、二種類のパターンがある。先ず、「構造化」と「非構造化」を部分的に組み合わせるというパターンである。話題に応じて、調査対象者に自由に語ってもらう部分と、質問の枠組みに沿って、厳密に回答してもらう部分に分けるやり方となる。

次に、質問項目や順序はあらかじめ設定されているが、「構造化」ほど厳密でなく「非構造化」ほど自由ではないパターンである。「構造化」と「非構造化」を対極とする中間となる意味で枠組みを設定するが、柔軟性を保つ。

生活史調査において、以上の3類型について考えると、「構造化」の場合、年代順に順序よく定められた通りに質問し、あらかじめ用意してある選択肢の中から回答してもらう。調査対象者全員に共通の質問がされるため、インタビュー内容が標準化されデータとしては処理しやすい。「半構造化」の場合は、誕生から現在に至るまで、小学校入学、受験、就職、結婚など、人生上の大きなイベントごとに大まかな設問を用意し、それぞれについて、事実とその時の想いを語ってもらう方法である。このインタビュー形式は、「構造化」よりも、個々の経験が浮かび上がってきやすい。「非構造化」の場合は、例えば、「あなたの人生について語って下さい。」といった大テーマの設定だけをして、あとは、すべて調査対象者にゆだねる。調査者の役割は、調査対象者の「語り」を遮らないように、相槌や、流れに沿った質問をするにとどまる。

どのタイプのインタビュー法が適切かは研究テーマ

や調査段階による。状況に応じて適切なものを選ぶことが調査者には求められる。

小泉・志水らによると、よいインタビューとは、自分の「目的」の内容と位置づけを学術的のみならず調査対象者にとっての意味という観点からも明確化し、その「目的」に沿ったインタビューを実施できる人のことである、と述べている。本研究で私たちは文献や統計で得ることのできない事実を掘り起こしたい。つまり、ニューカマーの4人の生徒が、日本に来てからの実体験、生活を分析し、彼らの「叫び」を明らかにしたい。そのためにも、テーマに沿った大きな設問を用意しながらも、それぞれについて事実とその時の思いを語ってもらう「半構造化インタビュー」を採用する。

3. 高校生のプロフィールとインタビュー内容

3.1 18歳A君（中国籍）

A君は、中国から4歳の時に父方の祖母が中国残留孤児のため家族みんなで日本にやって来た。家族は中国語、本人は日本語で話すため、コミュニケーションが困難。父親は日本語で聞くことはできるが話すのは苦手。小学校3年生の時にいじめに会うが先生の対応は十分でなかった。そのため小4の時には不登校になり、約1ヶ月間は学校にほとんど行けなかった。本人は、父の考え方が厳しく、自分の意見を言えないことが不満でストレスを感じている。

父は、中国文化、本人は日本文化を好み、本人は早く家を出たいと思っている。

<半構造化インタビューの一部紹介>

テーマ「進路・アイデンティティ」(Iは調部 Aは調査対象者)

I：高校進路に対して先生の不満ない？

A：ない。

I：もう卒業後の進路決まったん？

A：今バイトしている居酒屋。

I：よかったやん。親もOKやったん？

A：もう親の意見無視してるから....

I：何か不安ない？

A：うーん、自由がない。

I：自由？

A：うん。まだ親に縛られてる感じかな。

I：私も中国の友達がいるんやけど、むこうはやっぱ家族を大切にしている家族を一本柱にしているみたいな...それが日本とちょっと違うみたいやけど。

A：うんそう。僕それが一番嫌いなん。

I：うん。日本は今、子どもが好み勝って言って親のほう小さくなってるともね。

どっちの方がいいと思うんの？

A：日本の方がいい。

I：日本？じゃあ、家出て行きたい感じ？

A：即、出て行きたい。今すぐ。

I：そしたら就職して、お金ためて1人で住むって感じ？

A：絶対出る。高校出たらすぐにでも。

3.2 18歳B君（タイ国籍）

B君は、タイから中学2年生の時に日本にやって来た。母親は仕事のため数年前に来日し、日本に住んでいた。日本人と結婚し、1人の女の子が生まれる。B君はタイに祖父母と暮らしていたが、死去したため母親のいる日本に来る。普段の会話は、本人以外はほとんど日本語。本人は、日常会話はほとんど大丈夫だが、授業内容を理解することが難しいものもある。特に漢字がわかりにくく、テストが苦痛であった。

本人は、中学時代は少し不良グループといわれる男子とともに行動した。自分の意志ではないが、一緒に悪いこともせざるをえなかった。日本語も十分書けず、タイ語もかなり忘れて、母語が書けないので将来に不安を感じている。日本籍は取らないつもりでいる。

<半構造化インタビューの一部紹介>

テーマ「学習と進路・国籍」

I：じゃあ、聞くけど、中2,3はテストが一番苦痛だったんやろ。

B：でもあの時勉強やる気あった。

I：何？英語？

B：違う、理科。

I：理科何でやる気あんの。

B：プリントで答えあんのよ。そのまま、45~8点をとったんよ。あれ初めてやで。

I：まる覚えかな。

B：宿題テスト漢字なんて、読むか分からんのにまる覚えしてて、あたってた。

I：それ大変ちがう？

B：大変やけど、おもしろいや。

I：中3で進学ってなるやん。その時高校は？

B：中3の時、引越しして、親父の仕事が大阪にあったから。

I：お父さん、大工さん？

B：うんそう、それで近いところに。建築の友達も多いよ。それで、電車で通ってて、Y校...

I：Y高校行きたかった？

B：先生がこれでだめだったら他受けていいよって。先生、なんか受かってほしんよ。

I：じゃあ、先生が願書を？

B：うん。

I：どんな学校か知らなかった？

B：うん、知らん。最初、親父はT高校に行ってほしかった。「学校に言いに行こうよ。」って言ってたけど、

お母さんが先生と、ノリノリでね。そんなんで、学校はどんなんでもいいやろ、みたいな。

- I : 自分はどこが良かった？
 B : どこでもよかった。わからんから。
 I : その時不安はなかった。
 B : ないない。
 I : 進路の時、わからないから、先生の言うとおりでいいやみたいな感じ？
 B : はい。
 I : それで高校に入りました。どうだった？
 B : 入学式でC君と会った。お母さん同じタイの人とちがうかなって思って、話した。
 I : じゃあ、うれしかった？
 B : どうやろ、(笑い)
 I : タイと日本の文化の違いはどう？例えばB君もいいかげんな所もあるけど、C君もそうやけど、文化祭、体育祭とか学校行事進んでするやん。でも、みんな違うでしょう。
 B : 日本の学校は子供っぽい。中学の時から感じてた。日本の子ども勉強だけ。やるのがガキ。
 I : タイに帰りたいの？
 B : 僕日本にもタイにも住みたくない。もっと違うところへ行く。もっと広い世界へ。もっときれいなところへ。僕みんなと食べるの嫌い。食べる時、音鳴らして食べるの嫌い。
 I : 籍はどうなってる？
 B : 僕、日本籍とってない。籍一度とったら帰られへん。日本人になったら、タイで何も買われへん。
 I : 日本の文化あんまり好きではない？
 B : 普通。アメリカ好きなんよ。自由の国が。
 I : タイは自由なん？
 B : 自由ではないけど、日本みたいにうるさくない。日本は、社会がうるさい。国のルール厳しい。免許なかったら何もできない。日本、高校卒業しなかったら就職もない。タイはそんなんない。
 I : 今の一番の要望は？
 B : 今は早く卒業して出て行きたい。

3.3 19歳C君（日本国籍）

C君はタイから中学1年生の時に姉の留学のために日本にやってきた。

一つ年下のクラスに入る。父親は日本人であり、タイでレストランを経営している。現在、タイ人の母親、姉と暮らしている。家族とは日本語、タイ語で会話している。高校1年生の時、学校を休みがちになったが、担任の先生の電話で自分の気持ちを分かってくれていたことがわかり、学校に行き頑張ろうと思う。学校では日本人の考え方、行動に疑問を持っている。中学時代は3年生から成績がかなり落ちた。現在大学1年である。またC君は携帯詐欺に遭遇しており、現代社会

が抱える問題を垣間見ることができた。

<半構造化インタビューの一部紹介>

テーマ「携帯詐欺に遭遇・Y校の先生への好意」

- C : ちょっと問題があって。
 I : どんな問題？
 C : 携帯に、よくある詐欺サイトに脅迫みたいな入ってて、僕何もしていないのに、でもこっち何もわからんしと思って。
 I : それは言葉がわからんから？
 C : うんそう。その当時あちこちであったみたいやけど、
 I : お母さんに言えなかった？
 C : 怒られると思って言えなかった。誰にも言えなくて。裁判になるから怖くて行けなかった。
 I : 誰にも相談できなかった？
 C : うん、なんか僕友達だけしかメールしていないのに、「あなたは、このサイトを利用しました。憲法何とか条であなたは有料メールを使ってるのに裁判に訴えます。」って、してないのに言われたので、中学生の友達に言っても分かんと思ったし、むちゃ恐怖で、学校行けなかった。それでお母さんに僕の携帯見つかって怒られたけど。それでお母さんも僕もニュース見てなかったので大変だと思ってお金払い込んでしまった。それから電話も何回もあって、すぐその後学校に話したけど、自分の責任やからって。
 I : それはいつから？
 C : 3年の5月から。7月頃まで学校あんまり行かなかった。
 I : 他のみんなもあったんとかちがうの？
 C : 携帯のことで相談に消費者センターいって、「払ったらだめ。」って言われたけど、一回払ってしまったので、「最初払ったら止りません。」って言われたので、解約した。それで勉強どころじゃなくなった。
 I : そう、大変だったね。先生の対応は？
 C : 新しい先生ばかりで僕のこと知らん先生ばかりやから、知ってる人、1人か2人で言いにくいし、3年やし、自分のことは自分でしなければあかんしって感じで、「もういいわ」と思って先生には何も。
 I : その時、日本に来て孤独感みたいなものはあった？
 C : ううん。自分が、頑張らなあかんと思ってた。
 I : 最後の質問やけど、今までで、一番外国から来た子供として失敗とか、悔しかったことって何かな。
 C : やっぱり携帯問題。自分の責任なんやけどもし外国から来てるんじゃないで日本にずっと最初からいてる子供だったらこんなことにはなっていないかと思う。
 I : じゃあ、今振り返って、その時に学校の先生にな

んかやってもらいたかったことある？

C：お世話してくれた先生が3年間見とどけてくれたら嬉しかったな。

I：じゃあ、1、2年でお世話になった先生がいたら携帯のことすぐ相談できた？

C：うん、できてた。それで、高校でも3年生になって、磯部先生が大学院行ったんで、また同じかと思ったけど、全然違った。他の先生みんな対応してくれた。Y高校の先生は本当に僕のことを見てくれて、良かった。

3.4 19歳D君（中国籍）

D君は母方の祖母が中国残留孤児であるため、叔母の家族と日本に住んでいた。

D君家族も呼ばれて中学1年生の時に家族みんなで日本にやってくる。一つ年下のクラスに入る。両親とも全く日本語がわからないので本人が通訳。高校進路を決定する時、本人、両親の意思と違うY高校に勧められた。高校では、授業中うるさく、「目上の人、先生の言うことは絶対聞く」と中国では教えられていたのと様子が違うので戸惑う。したがってY高校に進学した事を後悔する。高校2年生で学校を休みがちになる。日本籍はもう少しで取れそうである。本人は早く日本人になりたい、中国人と思われたくないと思っている。今のストレスは何でも通訳させられること、親が口うるさいことである。不安を感じるのは、日本で中国に関しての問題が生じた時、自分はどっちについたらいいのだろうか、周りはぼくをどう見るだろうかということである。

<半構造化インタビュー一部紹介>

テーマ「学習・不本意入学・国籍アイデンティティ」

I：進路のことで聞きたいのだけど中3の時、「この時進路についてどうだったんだろう。」って。あのね、今色々研究してるんやけど、中国の人はちゃんと勉強してほしいって言う親の願望が強いって言うから、進路に対してはすごく敏感と思うのだけど…

D：うん、すごくうるさい。

I：で、その時どうだった？

D：当時保証人の人が奈良の高校に薦めてくれた。でも親の反対で、行けなかった。僕はその高校へ行きなかった。それで、学校でP高校とか色々紹介してくれて、で、「P高校だったらレベル高いなって、入っても中退するかもしれないから。」って言われたんよ。「それやったらY高校やったらついていけるから。」って言われたんよ。で、親も僕も何も知らんから、中国は高校に入ったら、かなりレベル高いんよ。レベル低いのはみんな中卒なんで、高校に入れない。僕が行ってた中学校は80名ぐらいしか高校に入られない、500人中。

I：うんそうか。厳しいもんね。だからみんな真面目にやるのが普通なんやね。

D：そう、だから高校に入ったら勉強できるし、僕もそう思ってた。でもY高校に入って違った。

I：その時どう思った？中学校の時こうやっておけば良かったみたいに後悔はあった？

D：うん、もう少し、勉強して、P高校行けば良かったなって思った。

I：その時先生、学校がなんかして欲しかったこととかある？

D：当時はなかった。

I：その時はわからんもんね。でも、今振りかえったらどう？

D：うん、「P高校行きな。」って言うてくれたら、P高校行ってたかなって。

I：今考えればもっと勉強しておけば良かったって、いうことだね。

D：うん、はい。

I：うーん、どういう事が違ったかな？「勉強したい。」っていうところがちがう？

D：Y高だったら、当時の自分の成績だったらほとんど受かるって、言われたんよ。入ってから、自分も勉強したくなかったし。

I：勉強したくなかった？

D：うん、勉強好きではないので。

I：そうか。学校文化ってわかるかな。中国の文化と日本の文化っていうのは違うやん。さっき、A君と話したんだけど、中国のお友達もいるんやけど、中国は家族が大切で、勉強もちゃんとするんやってね。

D：はい、自分は田舎なんで小卒の子もいるんで、自分は高校に入れたらいいなって思ってた。でも、思っていたのと違った。日本、ここかなり中国と同じで、「勉強、勉強」かなって思ってた。でも違った。

I：自分は「勉強、勉強」ってしたかった？

D：うんまあ、学校がそういうのであればついていけるんです。

I：親は何か言ってる？ 高校に行ってから？

D：「勉強しなさい。」ってうるさいです。ずっと、ずっと勉強ってうるさいです。

I：それに対してさっきのA君じゃないけど不満はある？

D：あります。

I：親に対して？

D：はい、縛られています、必ず。中国の考えと日本の考え違う。

I：親の考え方と、自分の考え方違うの？

D：うん。

I：中学校の時は親のいうこと絶対だったんでしょう。

変わってしまった？

D：うん、5年もこっちにいたら、縛られることが嫌。自分のことは自分でやりたいんで、進路も全部自分でやりたいんで。色々言ってくるんよ。「ここ行きなさい。あそこ行きなさい。」って。ずっとうるさい。

I：バイトのお金はどうなってんのかな。

D：自分は授業料払っています。月々お母さんに4万円渡しています。自分は授業料と携帯代は出すので。

I：全部渡すんやね。中国はそうなんやってね。受験の授業料とかは？

D：それはお母さんがちゃんと払います。

I：ちょっと聞いたのだけど、中国は一人が稼いだお金はみんな家族のためのお金って考え方なんやね。

D：はい。

I：日本は違うから、それが嫌なのかな？

D：いえ、それは別にいいですけど、自分も親のお金使ってるから、文句はないです。ただ中学校の時は親のいうことは絶対だった。全部親のいうこと聞いてた。高校になって変わってきて、高校に行かなくなった。

I：その理由をもう一度聞きたいのですが。

D：全然おもしろくない。学校に来てても意味ないなって思った。

4. インタビューから見えてきたこと

4.1 親とのコミュニケーション

A君とのインタビューでは、親とのコミュニケーションがあまりとれず、父親との関係がうまくいっていないことがわかる。A君は、4歳と幼少の時に来日したため、日本語を覚え、母語は忘れてしまう。一方、父親の方は、日本語を余り理解していないため、家庭では中国語が中心である。つまり、中国語と日本語がミックスした状態で、会話もスムーズにいかず、A君が伝えたいことをうまく伝えられないので、親子の関係がギクシャクしてしまうのである。それで、「もういいか。」とか、「早く家を出て行きたい。」と考えるようになる。

日本語の習得が完璧でないB君にとっても、タイ語が喋れない父親、妹との会話が困難であるのは当然であり、会話も少ないのは予想できる。彼は、「家では寝るだけ。」と言っていたが、これでは、日本語を習得できないだけでなく、タイ語も忘れてしまう。

C君とD君も家では、日本語での会話がほとんどなく、D君の場合、特に両親とも日本語が話せないの、日本語の通訳をしているのがストレスを感じることも語っていた。

家庭で日本語を使えないというのは、日本語も十分できない。また、親子とのコミュニケーションを十分とれないことは、家族の絆に支障をきたすことになる。

4.2 アイデンティティ問題

今回インタビューした4人のうち、3人は中学校の時に来日している。

人格形成の最も多感な幼少期に母国で過ごした彼らは、当然ものの考え方、とらえ方、価値観は、母国で養われる。それが、異国の地に来ることにより、異文化にさらされることは、常に不安がつきまとう。

日本に来日する前の彼らの日本の学校、高校生のイメージが、全く正反対だったのは彼らに大きな衝撃を与えたことがインタビューでも語られている。現在の日本では、生徒が、学校で、教師を尊敬し、個人より集団に重きを置き、規律正しい学校生活を送るとするのは程遠い。外国人がとらえている日本の学校文化と実際のそれでは、全く逆であるといってもよい。特に、Y高校では、生徒指導が難しい生徒も何人かおり、中国の学校文化に慣れているD君にとっては、かなりきついといっても過言ではない。

B君、C君のインタビューでは、文化祭、体育祭などの学校行事でタイの学校文化とは違うことで、ストレスを感じたことが語られていた。

自ら培われてきた文化が遮られることで、自分がどう考えていいのかわからず、自分のアイデンティティをうまくコントロールできないで学校生活を送るのは、彼らに大きな不安と、ストレスを与えていることが明らかになった。

4.3 いじめと不登校

4人のインタビューで気になったのは、「いじめ」と「不登校」の問題である。

A君は小学校3年、4年生の時、自分がみんなから避けられていたのが、今でも大きな痛手となって心に残っている。C君は中学三年生で自分が修学旅行の話に入れたい、それで、彼もみんなから避けられていると思った。彼らに共通していることは、インタビューからもわかるように、自分だけ仲間に入れたい、自分の居場所がないという不安からくるものである。これは、目に見えないが、どこに自分を入れたいのかわからない「差別の壁」をいじめと彼らは捉えたのである。

D君は、中学、高校時代に同じ内容のいじめを受けた。「言葉のいじめ」である。彼は、「しばしば偏見と差別に出会う」と言っている。中国の空港で中国人のパスポートでは入国が難しく、日本人のパスポートではあっさり入国できたことについても「差別」と感じている。学校内での「中国人」「中国語喋ってみろ」というのもこの「差別」からくるいじめだと実感して

いる。彼は、日本で強く生きるために無視をしたり、我慢をしたようだが、インタビューを通して、その時の悔しさが、伝わった。

ここで、いじめられた経験をもたないB君について考えたい。ニューカマーの子供たちは、多かれ少なかれいじめの経験をもつと先に述べたが、彼のインタビューではいじめられた経験がない。彼は、いわゆる不良グループと一緒にいることで、自分はいじめられることはなかった。反対に、「いじめ」の加害者となった経験を語っている。清水は、自分以外に「居場所探し」をするものを、「いじめ」の新たなターゲットとすることで、自身は「いじめ」から解放する場合がある、と論じている。つまり、いじめる者へ自らを位置づけることによって彼は、自分の居場所をみつけたといえる。

A君のインタビューでは、小学校4年の時に約1ヶ月、高校1年の時も休みがちになったと語られている。その理由は、本人も小学校の時はあまり覚えていなかったようだが、3年からのいじめで、学校が楽しくなかったため行きたくなかった、というのが彼のインタビューからもわかる。高校1年では父親との関係がうまくいってなかったからと言っていたが、この時の彼は、情緒的にとても不安定であったといえる。家庭で父親とうまくコミュニケーションがとれないため、自分の意見を出せない、父親の考えに納得がいかないことに、心理的な負担があったのだろう。しかし、職員会議で、彼の担任がこのことを説明し、職員全員が彼のことを理解し、2年に進級もできた。私も彼に英語を教えていたが、2年になる前に、「先生方に感謝している。2年になったらこういうことはないようにする。」と言ったのを覚えている。

C君は、高校入学してすぐ学校を休みがちになった。あまりに授業中うるさく、集中できず、学習できない学校が嫌になったからだ、とインタビューでは語ってくれた。でも、彼の担任の先生が彼の気持ちを理解し、母親に説明してくれたので、学校にまた登校することができた、ともインタビューでは、語っている。

D君は、高校2年になって学校を休みがちになる。彼の場合、インタビューからでもわかるように、自分が考えていた学校像とあまりに違っていたため、学校に来るのが面白くなかった、何のために学校に来ているのか、わからなくなったのである。しかし、彼は、徐々に学校に登校するようになり、卒業もした。これは、インタビューには触れることはなかったが、2年の担任が彼の思いを理解し、彼の話じっくりと聞く。担任の教科が社会ということもあり、中国の歴史、なぜD君が日本に来るようになったかをクラスの生徒に説明した。この時、D君は「こういう風にみんなが真面目に僕のことを受けとめてくれるなら、僕は、喜んで中国の話をしたい。」と言った。それから、D君は学

校に来るようになった。彼のインタビューの言葉に「将来、中国の歴史を教えたい。」というのは、この時の彼の気持ちが表れている。

清水は、自分に対する他者と自分自身のイメージにギャップを伴うようなニューカマーの子どもたちの日常は、それが積み重ねられることによって、新たな事態が引き起こされていくこととなる。それが、「不安な毎日」となり、個人の内部にどのように蓄積されていくのかという過程と、その結果として、「学校へ行ってもつまらないから、休むことが多くなった。」と語られる不登校傾向である、と論じている。A君、C君、D君は、まさしく、彼らの内面に閉じ込められた「不安な毎日」が、不登校を引き起こしたといえる。

清水の調査によると、S中学校では長欠者を除く平均欠席日数が日本人生徒の場合10~12日であるのに対し、外国人生徒は23~74日となっている。A君、D君も欠席は多かったが、先生方の理解、支援もあって、彼らは欠席が多いながらも無事卒業できた。

C君は2年生から生徒副会長として、活躍することになる。清水は、生徒会へ立候補したS中学校のマルヤマは、「生徒会の活動そのものに魅力を感じているよりも、やれる自分、目立つ自分、わかっている自分をアピールする場として、生徒会を利用しているみたいだった。」と話したことを論じている。C君はマルヤマと同じ気持ちではないかもしれないが、2年の時の担任であった私から見て、彼は、とても生き生きとしていったように思える。

B君は不登校傾向はなかったが、高校では、遅刻が多く、授業中も隣の生徒と話をしたりと、決して真面目に授業を受けるタイプではなかったが、彼の学校内での居場所はしっかり確保していた。インタビューにおいても、「学校に行きたくない」という言葉は一度もなかった。

彼ら4人のインタビューを通して、「いじめ」・「不登校」については、彼らが学校で、自分の「居場所」を見つけられるかどうかで回避できることが理解できた。

4.4 言語の問題

今回のインタビューで、重要な考察対象となっているのが、「言語」である。「言語の問題」は、多様な問題に密接な関係をしていることが4人のインタビューのなかでもわかる。

外国人の子どもの課題は、来日時期、年齢、成長過程などにより様々である。しかし佐久間によると、来日時の年齢によって、日本語習得の問題点はいくつかのタイプに分けて、日本語習得の特徴と問題点を確認することができる。一つは、小学校就学前に来日した子ども、二つは、9歳の壁とも言われる小学校1年から4年来日した子ども、三つは、小学校高学年で来

日した子供、四つは中学生で来日、五つは高校で来日である。

A君は、一のタイプで、当然日常生活は日本語となり、母語が不自由になる。B君、C君、D君は四のタイプで、中学時に来日し、日本で高校教育を受けるには制度面と日本語の面で不利であり、日本でも母国でも高等教育が中途半端になるケースである。これは、後に述べる高校進学においても大きな問題となる。

A君のインタビューから彼は、両親、祖母より日本語を早い段階で習得し、母語は消失しつつある。日本語ができず、母語しか話せない親とのコミュニケーションはできない。藤井は「ことばは、相手に自分の気持ちを表現し、伝え、人と人との結びつきを強め、世界を共有させる。そして、ことばはコミュニティをはぐくみ、コミュニティはことばをはぐくんでいく。」と、述べているが、A君はまさしく幼少の時に得られる家族とのコミュニティ不足だといえる。つまり、子供の未来に向けての「生きる力」形成の妨げとなったといえる。

B君のインタビューでは、「言葉の壁」が、彼に学習面で大きな痛手を与えたことになったのがわかる。中学校になると日本の子どもからみても教科の内容は一段と高度化する。例えば、文章のなかで、意味を理解しつつ応用できるようにならなければならないし、各教科に登場する漢字や専門用語も急に多くなる。また、学級担任制から教科担任制になるため、外国人の生徒にとっては親身に相談に乗る教員がいなくなり、大きなハンディとなっている。B君は来日して日本語の家庭教師をつけてもらったが、とりあえず困らない程度の日本語を習得するためだけである。ニューカマーの子どもへの教育においては、「日本語ができない限り、授業はわからない。」という前提のもとに日本語力が最優先されている。学力形成は日本語の習得に伴うと考えられ、日本語さえ習得できれば学習上の問題はなくなるものと考えられているのである。それゆえ、「日本語を習得するまで、授業がわからなくても仕方がない」とみなされる。B君の場合、日常会話にはそんなに支障はないが、読み、書き、また会話でも難しい言葉が入ると理解しにくくなる。特にテスト問題では、漢字が読めないので問題の意味がわからない。彼もそのことを先生に言わなかったため、先生もそれに気付いていない。つまり、日本語習得過程における学力形成の問題は放置されやすい。

「授業を理解するための第二言語としての日本語」を習得するには、相当な期間を要すると考えられる。

B君はインタビューで、「タイ語も日本語も喋れるけど書かれへんし、将来が不安」と語ってくれた。佐久間はこう述べている。外国人に対してわれわれは、日本語力はともかく、母語は完全とみなしがちであるが、こうした子どもは母語も不完全な場合が多い。家

庭内言語や話し言葉に限定され、読み・書きの訓練が欠けているからだ。

C君は、父親が日本人なので、生まれた時から日本語・タイ語2ヶ国語を使い、読み・書きもできていたので言語の関してはそんなに問題はない。しかし、彼のインタビューでも語られていたが、彼が、中学3年の時に携帯事件にあう。本人だけでなく、母親も携帯のメールに入った言葉が理解できず、当時ニュースもあまり見ていなかったのが、これが詐欺だとは気付かず、多額なお金を支払ってしまったのである。こういった事件は、ニューカマーの子どもだけでなく、大人にも起こりうる事件であり、注意が必要である。

D君も中学生で来日したが、中国は、漢字文化圏に属していて、親たちが教育に価値をおいているせいか、インタビューでもわかるように学校の授業もテストも全く苦にはなっていない。それどころか、「Y高校の授業は簡単すぎて面白くない」とも言っている。ただ、彼の両親は全く日本語を話さない。そのため、至る所で、両親の通訳をしなければならない。C君もそうだったが、親への通訳はかなりのストレスであり、D君の場合は、両親とも日本語が話せないのが、学校の面談の内容も彼が全部通訳をした。

以上言語の問題について論じてきたが、4人のインタビューを通して「言葉の壁」は私が想像していたより厚く、そして、それは幅広い問題領域を形成していることが理解できた。

4.5 学力・進路問題

学力・進路問題についてもニューカマーの生徒にとって大きな課題の一つである。特に、中学校までは義務教育ではあるが、高校進学となると受験制度があるため、高校在籍数は少なくなる。小林は、近年は中学校在籍者が増える傾向にあり、中学卒業後、高校進学をする生徒も増えているが、実際は学力不足のため、希望する高校でなく、いわゆる底辺高校や定時制に集中したり、進学そのものを諦めてしまう場合も少なくない、と述べている。

インタビューをうけた生徒4人はこの小林の論にほとんど当てはまっているといえる。

それは、インタビューの中でもわかるように、彼らは全員Y高校を第一希望とはしていなかった。

ここで、Y高校の説明を少しすると、普通科で一学年に6クラスあり、生徒在籍数は、615人（平成19年度4月現在）である。1年間に多数の退学者、休学者、留年生があり、教師は、生徒指導に追われる毎日である。ニューカマーの生徒以外でもY高校進学を第一希望にしている生徒は少ない。

このY高校に入学してひどく後悔したのがD君である。彼は、「中国帰国者」の子どもであり、そういった子どもの親は、教育に価値をおき、子どもに高等教育

を受けさせたいと願ひ、大学進学も望んでいる。実際、インタビューでもわかるように、D君の親は大学進学を強く望んでいる。彼が行きたいと思っていたのは、P高校であり、国際交流科があるところだ。ただ、ある程度の学力が必要なため、中学3年の担任は、Y高校を薦めたのであろう。ただ、D君にとって、「P高校受験」にチャレンジしなかったことが、大きな後悔になっているのは確かである。それは、彼の保護者も同じ思いである。

C君、D君は、工業高校のT校が第一希望である。A君が受けた第一志望のU高校も工業科があった。C君がインタビューで言っていたように、工業高校で、専門技術を勉強させたいという親の願ひ、そして、それが一番将来仕事に活かせる高校であると思つての希望であった。しかし、日本語能力が不足しているニューカマーの生徒たちは、日本の子ども以上に「高校入試の壁」は大きい。

先述したように、高校入試には高校教育についていける「学力」が必要となる。太田は、ニューカマーの子どもたちは第一言語ではない日本語のみによる授業を受け、日本語によって学力・能力だけが評価の対象となる教育システムの中に置かれていると論じている。

つまり、現在の教育システムのなかで、授業中日本語だけで学習してきた彼らにとって、明らかに、学力が身につくのは困難なことであり、「低学力」になってしまうのは仕方がないことなのである。C君は中学校3年で「P高校の推薦は校内選考でだめだった。」と、インタビューで述べていたが、日本人生徒と同列に成績を評価するこの学校システムも大きな問題がある。彼らの「学力」が、高校入試を受験するにあたって、「学力が低い」「能力がない」と考えるのは問題ではなからうか。

現在誰もが、「日本社会では高校は卒業しないといけない。」と考えている。それで、高校入試において、「学力問題」ともう一つ忘れてはならないのが、「進学指導」である。教員は、つい高校合格がゴールと考えてしまい、とにかく合格できるところへ生徒を受験させる、と考えてしまうのである。元中学校教員であった神戸は、自分の体験談でこう語っている。「高校合格は、次の生活・学習の場を決めただけで、外国人生徒が自分の力で生きていくための長期的な進路指導になっておらず、教員が達成感を得るための、自己満足的な進路指導に過ぎなかった。」

ニューカマーの子どもたちの保護者は、「高校受験」についてどう思っているのだろうか。C君の母親はつぎのように語った。

「2年までは成績が良かったけど、3年になってあの携帯の事件があって、急に成績が下がって高校にいけるか心配だった。この成績だったらY高校しかいけ

ないといわれたけど、家の近くだし、普通科なので、よかったと思った。だいたいこういった子どもは定時制か、通信制に行くから。でもできれば、中1の時から親に日本の高校の事をもっと教えておいて欲しかった。子供は、まだ中学生、学校のことは分からない、親に説明しといてもらわなければ分からない。でも、高校でいろいろ話を聞いてもらう先生がいっぱいいたので良かった。」

このように本校の教員への対応についての母親の良好な反応が今後のニューカマー生徒ならびに高校生への教員の希望を象徴するものである。

おわりに

インタビューからわかるように、ニューカマーの生徒の保護者は、日本の教育制度、受験制度についてほとんど知らない。そのため、教員の指導のまま高校選択をするのである。4人のインタビューをとおして明らかなことは教員側は日本の生徒以上にニューカマーの生徒がおかれている状況を把握し、彼らの声を聞き、彼らが望んでいる進路に対応していくとともに、彼らを受け入れるシステムとしての高校改革に足を踏み出す必要性に迫られているのではないだろうか。

・参考文献

1. 清水 睦美「ニューカマーの子どもたち」勁草書房
2. 児島 明「ニューカマーの子どもと学校文化日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ」勁草書房
3. 佐久間 孝正「外国人の子どもの不就学」勁草書房
4. 清水 睦美・児島 明「外国人生徒のためのカリキュラム」嵯峨野書院
5. 宮島 喬・大田 晴男「外国人の子どもと日本の教育不就学問題と多分化共生の課題」東京大学出版会
6. 宮島 喬・加納 弘勝「国際社会変容する日本の社会と文化」東京大学出版会
7. 秋田 喜代美・石井 順治「ことばの教育と学力」明石書店
8. 志水 宏吉「教育のエスノグラフィ」嵯峨野書院
9. 油布 佐知子「教師の現在・教職の未来」教育出版
10. 刈谷 剛彦・志水 宏吉「学校臨床社会学」(マイノリティ問題)日本放送出版教会
11. 戸井田 克巳「日本の内なる国際化一日系ニューカマーとわたしたち」古今書院
12. 志水 宏吉・清水 睦美「ニューカマーと教育学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって」明石書店
13. 白水 繁彦「エスニック・メディア・多分化社会日本をめざして」明石書店
14. 志水 宏吉「教育研究のメソドロジー」東京大学出版会
15. 駒井 洋「新米・定住外国人がわかる事典」明石書店
16. ポール・ウィルス「ハマータウンの野郎ども」筑摩書房
17. 小泉 潤二・志水 宏吉「実践研究の進め 人間科学のリアリティ」有斐閣
18. 本田 由紀「若者と仕事」東京大学出版会